

社会—物質のアソシエーションとしての運動研究を開く —マイクロ運動研究における人間とモノの集合的考察へ—

日本学術振興会 (PD) 森啓輔

1. 目的

本報告の目的は、社会運動のマイクロ研究において、人間行動のみならずその周辺に存在しつつ行動に影響を与える非人間的物質に注目する理論的・方法論的視座を示すことにある。

2. 方法

社会運動の事例研究のための方法論は、具体的でマイクロレベルの状況に研究として介入するために、またローカルに埋め込まれた社会運動の因果関係を析出するためのものとして展開した。1990年代後半の社会運動論の感情的展開 (emotional turn) の登場により、運動論の「マクロ構造的バイアス」が批判されて、運動の状況に埋め込まれた文化的展望という方法論的オルタナティブが生じた (Jasper 1997)。

しかしながら、社会運動組織とその過程を形成する人間行動の分析のみでは十分でない事例が存在する。それは例えばデモや直接行動などの物理的な近接的集合性であり、また人間以外の技術的インフラの運動への影響である。なぜならマイクロな個人の物質性や、さらには非人間的物質性も、社会運動のアイデンティティ形成や継続性に大きな影響を与えるからである。この展望は、近年勃興しつつある新物質主義 (新唯物論) 社会学の社会調査として展開したり (Fox and Alldred 2017)、モノの統治性論 (牧野 2017) として展開したりしている。これらの潮流に位置付け可能な運動研究として、社会—物質運動という視座が提出されている (Rieger and Wagonner (eds.) 2016)。

ゆえに本論では、上記理論および方法論的展開を考察することで、社会運動の文化的および物質的側面の双方を分析するための具体的適用方法についていくつかの例を示す形で論じる。

3. 結果

第1に、新物質主義は、ポスト構造主義以降のテキスト中心主義を批判し、具体的な物質性をもつ諸アクターが、何を行い、何に影響し／影響されるかという点の関係性に注目する視座であった。新物質主義社会学は、この点を社会調査に適用する新たな潮流であることがわかった。第2に、社会運動論への適用事例として、マイクロ動員過程において物質的なものに注目することのアドヴァンテージが以下の点において明らかになった。(1) 動員できるものが身体のみの場合などに、その動員された身体の物質性と人間主体の両義的存在に注目することで、社会的物質的差別などの主体行為論的運動研究に資することができる。(2) これまで、運動の可能性を左右する外的条件や、運動が動員すべき資源として定義され、機会構造として捉えられてきたものを、より具体的な物質性をもつものとして描くことができる。それはメディアコミュニケーションの新たな物質的インフラの登場だったり、そのインフラのモビリティの可変性であり、これは運動のアソシエーションの地理的形態に大きな変化を与えることになる。

4. 結論

以下の2点が明らかとなった。社会—物質運動の視座は第1に、人間行動が人間身体を重点的に動員するような運動過程の場合、対象により深く迫る可能性を持つ。人間身体が物質として動員されるような直接行動性を持つ場合、移りゆく自らの身体の人とモノの間の幅を、現象学的考察の対象として位置付ける研究の視座が開けよう。第2に、運動を人間と非人間の集合体としてのアソシエーションとして考察する際に、運動展開の機会構造として、コミュニケーションテクノロジーの物的編入が運動に与える影響を対象にすることができる。これらは、人間中心主義的な運動研究から、非人間やモノ性との集合体としての運動研究を展開させることができるのである。